
東方夢物語

かしわもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夢物語

【Nコード】

N4097BA

【作者名】

かしわもち

【あらすじ】

夏の幻想郷

いつもと変わらぬ平凡な生活を送っていた霊夢

しかし一つの石がその日常を変える！

（かもしれない）

まあそんな所でしょうな

第一話 始まり（前書き）

ハハッ

どうも、かしわもちです

今回初の投稿という訳です、はい

作者は痛い人なのであしからず…

この小説は二次創作です

若干の力オスも含まれております

「カオスだと！？プーさん蹴るなああ！」

…という方は戻るを押していつてね

第一話 始まり

とある夏の日の幻想郷。

人里では人々が賑わい活気に溢れていた。

そんな中、東の端に建っている神社、博麗神社では一人の巫女が暇そうにお茶を啜っていた。

霊夢「いつもの事だけど…暇ね。どうして私の神社には誰も参拝に来ないのよ。来るとすれば妖怪か亡霊ぐらいだし…」

魔理沙「私は亡霊でも妖怪でもないぜ。」

横から聞き慣れた声がした。

霊夢はため息をついた。

霊夢「…何の用？お茶なら出してあげないわよ。」

魔理沙「冷たいなあ。折角おすそ分けにキノコ持ってきたのに…」

霊夢「そこに座って待ってて頂戴。今お茶とお菓子持ってくるわ。」

そう言つと、さつさと行つてしまった。

魔理沙（相変わらず切り替えが早いぜ…）

魔理沙はふと思った。

霊夢「お待たせ」

魔理沙（早っ？）

霊夢「饅頭でよかったかしら？」

饅頭「ゆっ！」

魔理沙「あ、ああ。悪いな。

（饅頭つて喋ったけか？…まあいいや。）

霊夢「で、何の用？いつもみたいに遊びに来たの？」

魔理沙「まあそれもあるぜ。ところで、この石を見てくれ。こい

つをどう思っ?」

魔理沙はポケから小さな石を取り出し霊夢に見せた。

霊夢「すごく…黒いわね…。何なのコレ?」

魔理沙「さっき魔法の森からここへ来る途中で拾ったんだけど、何か不思議な感じがしてな。」

霊夢「うーん…確かに不思議ね…何なのかしら?」

魔理沙「何か分かるか?」

霊夢「はつきりとは言えないけど、妖力と霊力ともう一つ力が宿ってるわ。」

紫「神力ね。」

魔理沙・霊夢「!」

いつの間にか後ろに開いていたスキマからb少女^{ビチューン}が現れた。

霊夢「また後ろから…。そんなことより神力が宿ってるってどういう事よ。」

紫「そのまんまよ。少なくとも幻想郷で生まれた石では無いわね。」

魔理沙「じゃあ、外の世界か？」

紫「さあ？どうかしらね？」

そう言うのと、饅頭をつまんで食べた。この時この黒い石がうつすらと光った事をまだ誰も知らない。

紫は食べる物は食べたと言って何処かへ行ってしまった。

霊夢と魔理沙は黒い石が何なのか調べに香霖堂へ向かった。

霊夢「ところで、具体的に何処で拾ったの？その石。」

魔理沙「お地藏様の足元に落ちてたんだ。見た事が無い石だったから拾って来たんだぜ。」

霊夢「それって、拾ったと言w」

魔理沙「拾ったんだぜ。」

霊夢「……。」

そのまま沈黙が続いた。

魔理沙は珍しい物を見つけるとやたらと持ち帰る。

主に紅魔館の図書館の本や外の世界から流れ着いてきた物も持ち帰る。
（泥棒）

く香霖堂く

カランカラン

香霖堂のドアを魔理沙が開いた。

霖之助「いらっしゃ……なんだ魔理沙か。」

魔理沙「霊夢もいるぜ。」

霊夢「こんにちは、霖之助さん。」

霖之助「二人そろって今日は何の用だい？」

魔理沙「見て貰いたい物があるんだ。えーと……これだぜ。」

魔理沙はポッケから取り出した黒い石を見せた。

霖之助「どれどれ、……これは……？」

魔理沙「何か分かったのか？」

魔理沙が身を乗り出して尋ねた。

霖之助「いや、僕にも分からない。」

霊夢「どういうこと？霖之助さんの能力ならその石の名前が分かる筈でしょ？」

霖之助「名前が分からない…というより名前が無いと言った方がいかな。」

魔理沙「どういうことなんだ？」

霖之助「どんな物にも必ず名前がある。それがもしそこら辺にある石や草であろうとね。けれども、この黒い石は只の石じゃない。何らかの力が宿っている。」

霊夢「妖力、霊力、それと神力ってやつの事？」

霖之助「ああ、その通りだ。」

魔理沙「でも、何でそんな物が出てくるんだ？」

霖之助「最近、幻想郷では変な事ばかりが起きる。霊夢も薄々感じてるんじゃないか？」

霊夢「そういえば、以前紫が教えてくれたんだけど博麗大結界がいつも以上に不安定だって聞いたわ。」

魔理沙「じゃあ、その博麗大結界の影響を受けてその石が出来たのか？」

霖之助「無いとも言いきれない。最近、人里の龍神像の眼が赤くなっているらしい。君達に言うのもなんだけど……何が起こるか分からないから気を付けた方がいい。」

魔理沙「余計な心配だぜ、香霖」

霊夢「異変ならいつもの事だし」

霖之助「……そうだったね、君達なら心配要らないだろう」

魔理沙「へへへ」

魔理沙は余裕の笑みを浮かべた

霊夢「じゃあ、取り敢えず神力について聞きに行きましょうか」

魔理沙「誰にだ？」

霊夢「神奈子と諏訪子によ。神様だし、何か分かるでしょ？」

魔理沙「だな。じゃあ行くとしますか！」

魔理沙と霊夢は石の手掛りを見つけに香霖堂を後にし妖怪の山の頂上にある守矢神社へ向かった。

その向かう途中の事だった。

霊夢「ちょ、ちょっと魔理沙！待ちなさいよ！」

魔理沙「どうしたー霊夢ー。何か遅くないかー？」

霊夢「これでもスピード出してる方よ！でも……何かいつもより体が重いというか、何というか……。」

魔理沙「それって、太っつ」

神霊『夢想封印　　瞬』

魔理沙「ちょ！待っ（ピチューンピチューン）」

ドゴオオオオ……

色々有りつつも妖怪の山にたどり着いた二人。

そこへ、

？「あややや、やはりさっきの爆風はあなた達でしたか」

霊夢「あら、文じゃない」

文「どうも霊夢さん、魔理沙さん、ご無沙汰してます。……ところで、今日はどんなご用事で？」

霊夢「神奈子と諏訪子に用事があるのよ。通してもらえる？」

文「……大天狗様にここの警備を任せました。どうしても言うのであれば、私を倒してからにして下さい。」

霊夢「結局、またこうなる訳ね……。」

霊夢が面倒臭そうに構える。

魔理沙「私も忘れて貰っちゃ困るぜ。」

魔理沙も構える。

文「この射命丸文、全力でお相手します？」

く無縁塚く

ヒュウウウウ……ドサッ

？「ひでぶっ！？痛ってええ……何処だよここ……？」

彼の目に映るのは見渡す限りのヒガンバナ

？「あれ？ここってもしかして……無縁塚……？じゃあここが……幻想郷か！」

俺のワクワクは止まらねえ！

第一話 始まり（後書き）

かしわ「はいどうも、かしわもちでござる」

かしわ「今回初の投稿という事でして皆様、どうでしたでしょうか？…ええ、自分でも…うん……何も言わんという………気を取り直して今回のゲストは博麗霊夢さんです！」

霊夢「宜しく」

かしわ「はい宜しくお願いします。

さて霊夢さん、今回は如何でしたでしょうか？」

霊夢「如何でしたかって言われても……特に無いわよ」

かしわ「妙にグサッと来るんですけど！？何か気になる事とかありません！？」

霊夢「んゝ…あ、そうそう、最後に出て来たの誰？」

かしわ「彼こそが今回の鍵を握っている人物ですよ！しかし彼が本格的に登場するのはまだ先だと思えますけどね」

霊夢「お賽銭…入れてくれるかしら……」

かしわ「それは無いですね」

霊夢「…いっぺんピチュるか？」

かしわ「……すみません」

第二話 黒い石（前書き）

第二話です。まあ気長にやらないか

第二話 黒い石

文「よつと」

射命丸が飛び上がった。

だが、様子が変だ。

射命丸がもし本気なのであれば、飛び上がるだけでも突風並みの風が起こる筈なのだが今はそよ風程度だ。
手加減でもしているのかしら……

魔理沙「先手必勝だ！私も全力で行くぜ！」

魔理沙が八卦炉を構える。

霊夢「ちょ、ちよつと魔理沙！？」

魔理沙「恋符『マスタースパーク』？」

八卦炉から魔方陣が現れ輝き始めた……が、

シュボッ

シュー……………

八卦炉は小さな火を出ただけで何も起きなかった。

文「どうやら今回は私に利がある様ですね、ゲラゲラゲラ」

射命丸はあざ笑うかの様に言った、おおづいづい

魔理沙「な、何で出ないんだよ!？」

霊夢「魔理沙、前を見て!」

振り向いた時にはもう遅かった、射命丸はスペルカードをかざし発動させた。

文「もう遅い! 風神『風神木の葉隠れ』?」

…が、

ヒュー……………

ざまあwww

弾幕は現れずただ虚しくそよ風が吹くだけだった。

文「あやや！？どうして私まで!?!」

シア「坊やだからさ」

そんなこと聞かれても私にも分からないわよ
そう思いつつも霊夢は、

霊夢「恐らく何をやっても無駄よ。私はスペルカードが発動出来る
しね。さっきの爆風がその証拠よ」

文「仕方ありません……お通します。で　　すが！私もお供
させていただきます」

ここまで強調して言う理由は多分、話の内容を聞いて記事にしよう
とでも考えているのだろう。
まあ、そのぐらいならいいか。

霊夢「分かったわ。好きにきなさい」

文「それでは、行きましようか!」

何故か一番張り切っているのは射命丸だった。
何をそんなに張り切っているのか霊夢達には分からなかった。魔理沙が小声で話かけてきた。

魔理沙「おい霊夢、良かったのか？」

魔理沙が心配そうに尋ねる。

霊夢「心配要らないでしょ。話を聞いてるだけだし……それに文がいれば道中は心配要らなさそうだし」

魔理沙「まあ…石の事聞いただけだしな……」

霊夢達は妖怪の山の頂上にある守矢神社を目指した。

く守矢神社く

途中、白狼天狗にまた霊夢達が何かするのではないかと誤解されたが、射命丸が説得し何とか守矢神社に到着した。

文「到着です……お疲れ様でした」

霊夢「あの白狼天狗どうにかならないの？」

文「すみません、あれだけではどうしても……」

申し訳なさそうに答える。

すると、神社の奥から緑色の髪少女が現れた。

？「あら、文さんに霊夢さんと魔理沙さんではないですか」

彼女の名は東風谷早苗

この守矢神社の巫女であり現人神でもある。

（通称 ミラクルフルーツ）

早苗「それにしても珍しいですね。お二方がここへ来るなんて……」

霊夢「神奈子に用があるのよ」

早苗「八坂様に……ですか？……ああ、分かりました、こちらです」

神社の裏から上がり長い廊下を通って大きな広間に出た。その広間の奥の真ん中に堂々と座っている人影があった。

早苗「八坂様、客人がお見えになりました」

？「ああ、ご苦労だったな、早苗」

そう返事を返すのはこの守矢神社の神様、山坂と池の権現である八坂神奈子だった。

（通称　ガンキャンギゃあああ！

霊夢「神奈子、聞きたい事があるんだけど……」

神奈子「黒い石についてだろう」

神奈子は知っていたかの様に答える。それもそのはず、霊夢達が来る前に紫が来ていたからである。

霊夢「なら話は早いわ。この石よ」

霊夢は手に持っていた黒い石を神奈子に見せた。後ろでは魔理沙が焦った表情でポッケの中を漁っていた。

魔理沙「霊夢……いつの間に取り出したんだ？」

霊夢「……あんた……霖之助さんに見せたつきりでこの石忘れて行ったでしょ……」

二人が香霖堂へ行った時、魔理沙は石を受け取らずに飛んで行ってしまったのである。霊夢は霖之助から石を受け取り急いで追いかけて行った。そして、現在に至るという訳である。
それを思い出した魔理沙は、

魔理沙「あ……アハハハ……」

と笑って誤魔化した。

霊夢「ハア……それより、どう？何か分かる？」

神奈子「あのスキマ妖怪が言っていた通りだ。三つの力が宿っているな……霊夢、この石を持っていて変わった事はないか？」

霊夢「そういえば……飛ぶ時体が重かったわ、あとは魔理沙が魔法を使えなかったり……文が風を操れなかったり……」

神奈子「成る程……どうやらこの石には能力を抑える能力を持っているらしいな」

それを聞いて霊夢は納得したみたいだが、魔理沙はまだ半信半疑だった。

魔理沙「じゃあどうして私や文はスペルカードが使えなかったんだ？ 石を持ってもいないのに……」

神奈子「多分、近くにいれば能力が抑えられるのだろう」

だから香霖でも分からなかったのか……

魔理沙は納得した様に頷いた。

霊夢「……で、どうするのよコレ……持ってたらかつちが危ないじゃないの……」

魔理沙「霊夢が持ってたっていいんじゃないか？能力が完全に消える訳じゃないし」

霊夢「え〜？面倒ね〜……」

渋々と石をしまった
別にいいんじゃないか、魔法使えなくなるとか私にとっては致命傷なんだぞ

霊夢「それじゃあ、何かあったら宜しく頼むわよ」

神奈子「ああ、何か解り次第連絡する」

射命丸を使っんですね、わかります

霊夢「よいしょ！…わわわ！？」

魔理沙「しっかり飛べよ霊夢」

霊夢「うるさいわねえ、さっさと行くわよ」

ふらつきながらも上手くバランスを保ち飛び去っていった

く無縁塚く

皆さん、どうも

先程幻想入りした者です
唐突ですが迷いました

？「いや、迷いましたじゃないだろ俺…」

どーすんのよこれ…場所の名前知ってても意味無いでござるよ

？「ハア…どうするかなー…」

俺はその場に倒れ込んだ

東西南北もわからない、誰かがいる訳でもない、空に飛ぶ事が出来る訳でもない

俺はその場で寝てしまった…

第二話 黒い石（後書き）

かしわ「はい第二話終了〜乙でした〜」

霊夢「いよいよあの人物が？」

かしわ「その通りでござる、次から視点が彼に変わるのでね」

霊夢「ちよつと何それ、聞いてないわよ!？」

かしわ「だって今言いましたもん」

霊夢「…………（ニコッ）」

かしわ「見るな!そんな目で俺を見るなああ!
ええい!続けるぞ!

次の話から主人公の本格的な登場となります。

では! ノシ」

第三話　　そうだ、博麗神社に行こう（前書き）

　　＼青年ダンス中＼

　　＼
　　や　　ら　　な　　か

　　……ハッ（；。。）

本編始まるＺＯ

第三話　　そうだ、博麗神社に行こう

紹介が三分ぐらい遅れたな

俺の名は水無月　蒼馬

バリバリ青春を楽しんでいる青年さ！

さっきまでは無縁塚のど真ん中で寝ていた筈なんだが…何故か誰かの家にいた

ご丁寧に布団まで掛けてもらっていた、ありがたや

辺りを見回すと、今では見る事が少ない囲炉裏、障子、草履などがあつた

蒼馬「誰が…運んできてくれたんだ…？」

無縁塚に来る人間は少ない筈、妖怪ならとくに喰われてる、だとすると…？

考えていると廊下の方から足音が聞こえてきた、障子が静かに開かれる

？「お、目が覚めたか」

大学卒業に投げる様な感じの青い帽子を被った…

蒼馬「か…上白沢…慧音…！？」

慧音「！　何故私の名を！？」

やば、すっかり名前言っちゃった

？「慧音く、あいつ目え覚ましたか？」

あーこれはもしかして…

そう、藤原妹紅だった

本当に来たんだな…幻想郷に…

妹紅「ちゃんと目が覚めたみたいだな」

蒼馬「はい、お陰様で」

慧音「教えてくれ！何故私の名を知っているんだ！？」

慧音が激しく肩を揺らす

ぎゃあああ！やめて！視界が揺れるー！

妹紅「け、慧音落ち着け！そいつ目を回してる！」

慧音「あ…」

俺は更なる眠りについた、今なら飛べる気がする

（一時間後）

慧音「取り乱して済まなかった…つい…」

慧音が申し訳なさそうに謝る

蒼馬「いえ、いいんですよ…ハハハ…」

結構キてたけどな…

慧音「すまん…改めて自己紹介をさせてもらおう、私の名は上白沢
慧音だ、隣にるのが藤原妹紅だ」

妹紅「よろしく」

蒼馬「水無月 蒼馬です、以後、よろしくお願いします」

慧音「よろしく、さて、先程の事だが…何故私の名を？」

やべえ、なんて言っかな…どうする…どうするよ俺！

蒼馬「えー…それはですね……………夢です」

慧音「ゆ、夢？」

やっちゃったよ俺…キィーヤ

蒼馬「そうです、夢なんですよ」

慧音「そうか…」

すみません慧音さん…いずれ話します…

妹紅「お前は外来人なんだよな？」

蒼馬「はい、仰る通りです」

妹紅「お前は運がいいな、無縁塚で寝てて生きてる奴なんて始めてみるぞ」

蒼馬「え？マジで？（迫真）」

妹紅「マジで」

…うん…知ってたよ妹紅…

ガララッ

？「慧音ー！いるんでしょー？」

慧音「…あれは霊夢か…すまないな、少し席を外す」

と言うと慧音は玄関の方へ行った
霊夢がここに来るって珍しい事じゃないか…？………お、こっちに来るな

慧音「それで？何の用だ？」

霊夢「この石について何か…あら？誰かしら？」

出た！初代脇巫女、博麗霊夢！

蒼馬「あ、どうも、水無月 蒼馬といます」

霊夢「ふーん…博麗霊夢よ」

予想通りの返事、ありがとございました

霊夢「この石よ」

あれ？あの石は確か…

慧音「黒い石だな…これがどうした？」

妹紅「慧音、何かその石…変な感じがする…」

失敬な！

霊夢「何か知ってる？」

蒼馬「あのーすみません」

霊夢「何よ」

冷てえなオイ！分かってたけど妙にグサッとくるぞこれ！

蒼馬「その黒い石は俺のです」

霊夢「……」

慧音「……」

妹紅「……」

静まり返る居間、静寂、そして俺に向けられる驚愕の眼差し……え？俺何か悪い事言っただけ？言っていないよね？何で皆あんなに驚いてるの？なにこれこわい

霊夢「じゃあどうするのよ？」

蒼馬「博麗神社に行こうと思います」

霊夢「何で私の神社に！？そんな事できる訳…」

蒼馬「賽銭入れますから」

霊夢「歓迎するわ（ニコッ）」

いい笑顔だ、計画通り…

霊夢「それじゃあ失礼するわ」

蒼馬「すみません、お世話になりました」

慧音「うむ、何かあればいつでも来い」

妹紅「じゃあな」

次は博麗神社か…全部回れたら回りたいな」

霊夢「…で、蒼馬はどうやって移動するの？」

蒼馬「徒歩です」

そりゃあもちろん徒歩ですよ霊夢さん、俺飛べませんもん
仕方ないね

霊夢「ハア…しょうがないわね…ちゃんとつかまってなさいよ」

蒼馬「え？それはどういう…のわあああああ！？」

キラン

俺、生きてたら、霊夢にお茶をご馳走して貰うんだ…

第三話　　そうだ、博麗神社に行こう（後書き）

かしら「第三話オワタ、いやー疲れたなー（嘘）」

魔理沙「おーい、嘘って書いてあるぞ」

かしわ「仕様さ（キリッ）」

魔理沙「それは別にいいが、どうして私がないんだ？」

かしわ「魔理沙さんはアリスさんの家に向かったという設定ですわ、はい」

魔理沙「アリスの家に？まあ用はあるけどな」

かしわ「泥棒ですね、わかります」

魔理沙「人聞き悪いな…借りてるだけだぜ」

かしわ「死ぬまででしょう？人はそれを泥棒と呼ぶんですよ」

魔理沙「う…（――；）」

かしわ「はい、それではまた次の後書きでお会いしましょう、ロケットピース！」

第四話 秘められた力（前書き）

初めて戦闘が入ります

短いんですけどね！

第四話 秘められた力

く上空へ

蒼馬「のおおおおお！？」

速い速い速いって！アカン！これアカンて！
いや、これは逆に考えるべきか？…よし…！

アクセルシンクロオオオオ！！

霊夢「はい到着」

霊夢が手を離す

え？今手を離す？あれ、俺やばいんじゃない？…

ベシヤッ ズザザザザ ドゴオッ

仰向けに滑り転がりそのまま木に激突した、普通死ぬよこれ

蒼馬「グフッ…痛った…くない…？」

そうか…これがクリアマインドか！

…うん、違う事ぐらいわかってますとも

霊夢「あら？蒼馬、貴方無傷じゃない」

蒼馬「傷つける気満々だったんですか！？」

霊夢「いや…ごめんなさい、あんなスピードは初めて出たから制御効かなくて…こう、身体が急に軽くなったみたいな…」

わざとな感じがしたが…嘘をついてる感じでもなさそうだな…

蒼馬「あー大丈夫ですよ、無傷でしたし」

あんなスピードで無傷な俺が信じられん…

さて、賽銭箱はどこかなーと…

あつたこれだよコレコレ

目の前にある神社、一見何の変哲もない普通の神社だった
その神社の正面に置いてある直方体の箱…そう、『サーセン箱』で
ある

見た目だけでも何も入ってなさそうだなオイ
確かポケットに…あつた

ウホッ…いい五百円玉…

それ
(チャリーン)

霊夢「お茶を淹れたから上がって頂戴？」

速っ！もう淹れたの！？

驚きつつも神社に上がった

そして広さ畳五常の部屋でお茶を啜っていた

ズズー…ふう…UMAすぎる！

蒼馬「良いお茶ですね」

霊夢「当たり前よ、私が淹れたんだもの」

蒼馬「左様でございますか

（ ； ）」

苦笑い、まあ美味しいのには変わらないが

霊夢「ところで蒼馬」

蒼馬「何でしょうか？」

霊夢「幻想郷に留まっちゃっていいの？」

蒼馬「？ どうしてです？」

霊夢「貴方の家族が心配してない？」

蒼馬「家族…ですか…？」

………

霊夢「…おい、そーうーまー？」

蒼馬「……え？あ、はい大丈夫ですよ、何とかありますって」

霊夢「今ボーっとしてたけど…大丈夫？」

蒼馬「んー…ちょっと境内を散歩してきますね」

俺はそう言つと境内の散歩に出た

ザッ　ザッ　ザッ　ザッ…

蒼馬「家族…ねえ…」

家族…それは今の俺にとって無縁な言葉だ、俺も人の子だ、両親もいる

いや、正確にはいた…かな

………そろそろ戻るか

そう思っていた矢先だった

グルルルル…

狼のような妖怪が俺の周りを囲んで回っていた

オイオイ冗談だろ…ここで妖怪かよ！

ヤバイヤバイと考えていると空から声が聞こえてきた

霊夢「蒼馬！早く逃げなさい！」

霊夢は俺の方に向かって来るが遅い
妖怪が一斉に飛び掛かってきた

ここで俺は死ぬのか…？
信じねえぞ…お断りだ！

蒼馬「おおおおおおお！！！」

俺はがむしゃらに右拳を前に突き出す、何もしないよりはマシだ
そう思った瞬間だった

突然握っていた黒い石が割れ衝撃波を放った
その直後に俺を中心に竜巻が起きた

蒼馬「な、なんじゃこりゃああ!？」

もう訳わからん、くそつたれ!

ゴオオオ...

竜巻が収まり辺りの視界が開けた
吹っ飛ばされた妖怪がまだこちらを見ていた、しつこいな...

霊夢「貴方...その格好...!」

空にいた霊夢が驚いた目で俺を見ていた、え?俺そんなに変k.....

蒼馬「な...何だコレ!？」

先程着ていた服と明らかに違っていた
黒い袴、白い小袖、蒼い羽織、刀...どゆこと!?

グルル...ガアッ!

妖怪がまた一斉に飛び掛かってくる、ふと頭に浮かぶ文字、

これって...面白え、やってやらあ!

蒼馬「剣戟『円月斬 望月』!..!」

抜刀しその勢いのまま円を描く様に回転斬りを放った、が妖怪には当たらなかった

しかし後から青い衝撃波が流れ、妖怪に直撃し吹き飛ばす

蒼馬「ハア…ハア…やったか？」

あ、ヤバ、これフラグだ

ボオンツ　ボオンツ　ボオンツ

妖怪が突然弾け飛んだ、しかし黒い紙の様なものがひらひらと宙を舞っただけで消えていった

妖怪じゃあ…なかったのか…？

霊夢「蒼馬！大丈夫？」

蒼馬「大丈夫だ、問題無い」

霊夢の気遣いを台無しにする様な言葉、サーセンw

霊夢「それにしても…何なのよその格好といい、今の技といい…」

蒼馬「さあ…？俺にもさっぱり…」

霊夢「まあ無事で何よりだわ、詳しい事は神社で聞くから」

そう言うと霊夢は神社の方角へ飛んでいった
さっきから思ってたがこの格好…

いいセンスだ

さて、俺も神社に向かうとするかな

第四話 秘められた力（後書き）

かしわ「第四話終了おつつおつつ！」

魔理沙「お疲れ様なんだぜ、にしても何だっただんだあの妖怪モドキ？」

かしわ「現段階ではまだ解明されていない状況です、それも後々…（結構先）」

魔理沙「この先はどんな奴らが出るんだ？」

かしわ「んー旧作の方はわかりませんが…一応全員出す予定ではいます…多分…」

魔理沙「確証無いのかよ…」

かしわ「仕方ないね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4097ba/>

東方夢物語

2012年1月14日17時51分発行